

同志社大学一神教学際研究センター

日本オリエント学会

共催

公開講演会

古代エジプト人の神々

● 講 師 ●

すいた ひろし
吹田 浩

(関西大学文学部教授)

● 日 時 ●

2007年3月17日(土) 午後2時~4時

● 場 所 ●

同志社大学 今出川校地 神学館3階 礼拝堂

○お問い合わせ

同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

TEL: 075-251-3972 E-mail: info@cismor.jp HP: <http://www.cismor.jp/>

《プログラム》

1) 挨拶 前田 徹 (日本オリエント学会理事・早稲田大学文学部教授)

2) 講演 吹田 浩 (関西大学文学部教授)

「古代エジプト人の神々」

3) 質疑応答 司会 中田 考

(一神教学際研究センター幹事・同志社大学神学研究科教授)

4) 挨拶 中田 考

《講師紹介》

吹田 浩 (すいたひろし)

1961年5月生まれ

関西大学文学部史学・地理学科卒業

関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了

シカゴ大学言語文明学科客員研究員 [1998年度前半]、カイロ大学考古学部客員研究員 [1998年度後半]

関西大学文学部総合人文学科史学・地理学専修教授

[翻訳] ヤン・アスマン、『エジプトー初期高度文明の神学と信仰心』、関西大学出版部、1998年。

サッカラのイドゥートのマスタバで、「日本・エジプト合同マスタバ・イドゥート調査ミッション」として地下埋葬室の壁画の修復をおこなう。[2003-]

《講演概要》

「古代エジプト人の神々」というタイトルは、現代人が思い浮かべる神々ではなく、古代エジプト「人」が考えていた「神々」について話をしたいと思いつきました。

古代エジプトの歴史は研究者を苦しめます。資料が宗教資料に偏っている上に、数多く残っている宗教資料も断片的であり、しかも暗示的なのです。儀式の一場面、来世の一場面の描写ばかりが残されており、しばしば、エジプト宗教には体系性がなかったと言われていています。

例えば、「オシリス物語」という有名な神話があります。しかし、これでさえ実は紀元後のギリシア人、プルタルコスが編集したものです。古代エジプトには、体系的にまとめられたオシリス神話さえありませんでした。神々についても同じです。人間の姿をした神々、動物の姿をした神々、人間の姿に動物・昆虫の頭をした神々がいます。しかも、同じ神が様々な姿をもっています。

このようなことから、エジプトはしばしば「神秘の国」と呼ばれ、資料に即さない不思議な解釈がなされることがあります。本日は、エジプト的でわかりにくいのですが、隠れているエジプトの神学と神々を考えてみたいと思っています。

まず古代エジプト人にとっての「神」の基本的な性格を見てみます。神は決して具体的な姿を持つものではなく、そこに何かがいるという体験に基づき、形態には最後までこだわりませんでした。このような事例を、古王国時代や中王国時代の資料から見てください。驚くほど柔軟な神観念（世界観）を見ることができます。

新王国時代になると、それでも神学の体系化の試みが見られるようになります。王家の谷にある宗教文書「アムドゥアト」などです。王のみに許された文書であることから、当時の最高の神学であったはずですが、ここにも、神観念の柔軟さを見ることができます。

このような神は、社会に危機が発生すると比較的容易に一神教への道を取りました。一般的に危機は権力の集中を生みますが、古代エジプトの形態にこだわらない神観念は一神教化にあまり抵抗がなかったのではないかと思います。このような事態は、新王国時代の帝国主義政策が行き詰った第18王朝の終わりごろに明確になりました。

このような一神教化への歩みは、初めはその推進者の個性によってアマルナ宗教という過激な形で行われました。本来、エジプトの神は宇宙的性格をもっていますが、この神は言葉を話さない太陽そのものであり、「自然哲学」と呼ぶ研究者もいます。

その後すぐに多神教教へ復帰しますが、一なる者を求める動きは止まりませんでした。そこでは、神は人間の苦しみに耳を傾ける者として現われます。「アメンエムオペトの教え」や「インシンガー・パピルス」には、エジプトの末期時代の神学が垣間見えます。

MEMO

